

調査日 群馬県森林組合連合会共販所 7月3日

猛暑が続く中でようやく梅雨入が宣言されたが、梅雨と言う季節を設定しなければ既に真夏である  
県森連の荷降ろし場にはいつている原木は、梅雨のさなかにもかかわらず皮剥けが少ない。

いつもであれば、雨の中で皮の無いヌルヌルの丸太と格闘して居る時季になるが、見える景色は  
真夏で入荷の少ない、のどかな市場の様子である。

市に掛かっている物件も、半分は前回からの売れ残り物件という事で、当然樹種の欄に

”曲り”とか”大節”とか何かしらの瑕疵が表示されるものも多く、値が安いどころか無入札も多い。

入札の結果発表の時でも、残っている買い方はほとんど無く、私の様に価格の動向を聞きに来ている  
2〜3人が居るのみである。結果は請求書を見れば判るし、特に欲しいものも無いのであろう。

売る側にしてみれば、残っている人がいれば更にもうひと押し売り込めるのだが、買い方はそんな事も  
判っているから長居はしない。県森連の発表は2番札や応札枚数、さらに不落札物件の  
応札価格まで読み上げるから、ゆっくりと読み進められるがそれでも15分あれば十分だった。

救いなのは虫害が進む時間を与えず高温になっているので虫の動きが見られない事だ。

しかし樹皮には卵がある筈なので、いつ孵化して来るか油断はできない。

今森林組合が伐っている、県有林や共有林なども心配である。

山土場に桎積して”山土場入札”を試みる様だが時季的には心配な季節である。

”山土場入札”は国有林では昔から行なわれていた方法で、これ自体は新しい事では無いのだが、  
検知の方法を一部AIで行う方法を取り、現物の写真を公開して、WEBで入札を受け付ける所が新しい。

県は入札事務を県森連の市場に委託し、原木生産から山土場に桎積するまで森林組合で行う。

造材は県有林系の支持によって行われる。A材・B材・C材と品質に拠って分けられるが、山元での  
選別は難しい事・更に県の造材指示が時の原木需要に即座に順応できているか？

課題はまだ山積しているように見える。

現に県有林の山土場へ行って、桎積されている物件を見る限り、すべて3.0m造材になっており、太さも  
用途を考えられた仕分けになっているとは思えない内容だった。

この物件を見た買い方の中には「こんなに細い3.0m材を混桎して何に使うんだ？」とか

「こんなに太い3.0m材が入っていては、機械に入らない。」とか言う声も聞こえている。

もう一つ気掛かりなのは、現場のセキュリティだ。

かつて国有林の山土場では、検知が済むと白ペンキで桎に白帯と呼ばれる白い帯を描き、封印した。

昨今は昔と違って、価格の安い原木の盗難は余り見られないが、ノーガードで良い筈がない。

後は伐採から引き渡しまで、いかに短時間で行うかである。季節を考慮して実施しないと価格差  
どころか、損害すら出かねない。木も生きた植物であり、野菜と同じように旬と言う物がある。

昨今では、伐採した原木はすぐに直送でも、市場でも出荷され加工までの時間を短くする事ができるが  
山土場入札では、山に置く時間が長くなりがちなので、実施には季節を考慮した方が良い。

調査日 素材生産協同組合 7月8日

こちらの市は、今回は”お中元市”と銘打って開催された。

素生協の市は、季節ごとにその時季にちなんだ名前の付いた市が開催される。

原木の市場だから「この時期でないと手に入らない。」というような物が出る訳では無いのだがちょっとした記念品と共に季節を感じさせてくれる。

特に気象がメチャクチャになり、原木の伐採時期も季節感がぼんやりしている昨今では

「ああ、今はそんな季節かー」と気付き、一年の中で今がどの辺りに位置しているのか認識させてくれる。

考えてみると、1年の前半は総会・総代会などのビッグイベントに心を遣い、後半は新年度事業に邁進する。大まかなビジョンはあるものの、日々の仕事は1〜2ヶ月先を見て動いているに過ぎないのではないと思う。農家であれば季節や陽気に沿って1年の仕事を組み立てているが、林業界では季節感が薄らいでいる気がしてならない。

むしろ買い方の方が季節感があり「こんな季節にドカドカ木を伐って、俺たちにどうしろって言うんだ？」という声上がる程だ。暑いとか寒いだけでなく、仕事に季節感を取り戻したいものだ。

素生協の市は、国有林材も増えてきて、ヒノキも市に出るようになった。とは言えこちらの市ではヒノキに関しては、足元を流れる神流川の向こうの秩父の買い方が圧倒的に強い。

元々地元には、ヒノキを使う買い方はあまり居ない様だ。

国有林材はある程度管理されている事が判っているし、売れ残ったら困るという事情もあるので比較的売れ行きは良い筈なのだが、3.0mの16〜18cmの桧が売れ残った。

一般材にも3.0mの16〜18cmの桧が2件あったが、それよりも安く不落札になっている。

かと言って一般材の同寸法の桧が高いか？と言えばさほど高い訳では無い。

かつては柱材として最適な寸面と言われたが、これより太い20〜24cm位の寸面に主力が移って久しいスギの3.0mの16〜18cmはもう生産すべきではないのかも知れない。かと言って4.0mに伐ったところで売れ筋という訳では無い。18cmは上の仕分けに入れれば何とかなるかも知れないが、16cm辺りは難しい

今は構造材と言えども、集成材が半分以上を占めると言う。もちろん構造材であるからそれなりに規格は厳しいシバリがある。柱は同程度の強度を持つ材を4枚張り合わせる。もちろん途中でジョイントするのではなく3.0m材を4枚だ。横架材は更に用途に応じて積層枚数を増やして行くがこの時、強度(ヤング係数)のある材を外側に配し、真ん中は柔らかい材を挟み込む。

この事により、上からの荷重に対して粘りを生み出す。との事だ。

7月4日の新聞に県内の住宅着工数が12%減少し、10,000戸を割り込んだ記事が載っていた。

厳しい状況下でも、木材の性能の向上と強度の規格化が進み、木材自体は進化している。